



# 恥じらい薄着検診

女子高生入院ダイアリー

草飼晃

挿絵／ズンダレぼん

立ち読み版

KTC  
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

第一章	気ままな入院患者	4
第二章	はにかみ初フェラチオ	41
第三章	恥じらい初セックス	102
第四章	女子高生桃色肉体検査	169
第五章	女子高生と女医とナースとぼく	218

## 登場人物

Characters

### 高田 誠

(たかだ まこと)

愛香の恋人の高校生。彼女の突然の入院に困惑しつつ、お見舞いに通ううちに、麻友美の持ちかけたアルバイトに参加することになる。

### 入江 愛香

(いりえ あいか)

誠の恋人。相思相愛ながら、なかなか進展しない誠との関係にやきもきしている。パジャマを盛り上げる美巨乳を持つ女子高生。

### 梅 麻友美

(うめ まゆみ)

南春山病院に勤務する女医。女性にしては長身で、クールな面立ち。誠達を「新薬試験」のアルバイトに誘う。

### 木之下 なつ

(きのした なつ)

南春山病院に勤務するナース。童顔・小柄ながら、メロンのような巨乳の持ち主。アルバイトでは麻友美の助手を務める。



よく口にする、ばか、とは何かニューアンスが違った。

「愛香ちゃん……痛かったんだよね」

「うん。ちよつとだけ……」

誠ももう少し何か言おうと思ったけれど、うまく口がきけなくなっていた。なおも少しずつ肉棒は沈みこんでいく。関門を突破した後はむしろ愛香の膺の方が積極的にペニスを呑みこもうとしてくれている——そんな感じさえ誠は受けていた。

（ど、どうしよう……ぼく、頭の中が真っ白になってきたよ！）

愛香ちゃんのことを氣遣ってあげなきゃ、と気持ちでは思っているのに、頭の中が勝手に煮えたぎってものが考えられなくなっていた。下腹部からペニスにかけても同じように煮えたぎり、持ち主の言うことなど聞いてくれなさそう。

なんだか亀頭の表面も、ペニスの幹の表面も全部、みっちみちの膺肉ととろけ合っ  
て一つになってしまったように思えた。

ずき、ずき、ずき……と、その一つになったものが脈打っているのがわかる。愛香の鼓動なのか、自分の鼓動なのか、それはもうわからなかった。ひよつとしたら、出血している裂けた処女膜から胎内の血管の脈打ちがつつたわってきているのかもしれないな  
かった。

ぐい——。

誠の腰が勝手に動いた。さらに奥に向かって突くように。すると。

「……ん、ンンッ……ッ」

愛香がまた眉をひそめてつらそうにうめいた。

締めつけにこぼしそうになって誠が動きを抑えていると、やがて愛香がふうつ、と少しだけ力を抜いたのがわかった。

誠の背中に回した腕の力も弱まっている。

「愛香ちゃん、大丈夫なの……？ ぼく、乱暴だった？」

「ううん——」

愛香はまぶたを上げた。

溜まっていたのだろう。涙がつーつと両方の頬に流れる。それでもおさななじみの声は、誠が思っていたよりも落ちついていたし、つらそうでもなかった。

それにしても。

（なんて狭いんだろう。なんて弱々しいんだろう……でも！）

やばい！ 気持ちよくてどうにかなりそう！

相変わらずみっしりと四方八方から龟头が粘膜に包みこまれている。気のせいだろ

うか、それが時折、みり、みり……と静かに波打つように震えている。

「ねえ、誠。遠慮しなくていいつたら……乱暴なのはいやだけど、誠はやさしすぎるんだよ、きつと……わたし、誠としつかり一つになりたい。ちゃんと誠を受け入れてあげたい。そうしないと、誠にきらわれちゃうんじゃないかって……」

「あ、愛香ちゃん——！」

（まさか愛香ちゃんの方がそんなことを気にするだなんて、ぼく——考えたこともなかった……）

愛香の顔はまるではちみつでも塗りたくったかのように汗で濡れて輝いている。

「ああ、誠って、頼りないかと思つてたけど……こ、こんなに逞たくましいんだね……男子つてみんなこうなのかな……そうじゃないよね……？ 誠だからだよね」

おさななじみはふたたび目を閉じていた。眉と眉の間に小さく皺を寄せている。

その、ぶる、ぶる、と小さく震える睫毛やまぶたと同じように、誠のペニスを包みこんだ膣粘膜もまた、かすかにうごめいていた。

それが気持ちよくて誠が思わず腰を揺り動かすと、豊乳の女子高生は子どもがむずかるような声を発して悶える。熱い肉でできた壺もけなげに誠の肉棒を受け入れつつ、押し出そうとでもいうかのように圧迫してくる。気を抜いたら——。

(こぼす前に、追い出されちゃいそう……)

誠の体重を受けて、愛香の太ももからお尻にかけてが、くにゅ、とかたちを変えている。重くはないだろうか、イヤじゃあないんだろうか、と気にしつつも、誠はごりごりと愛香の身体をバスマットのの上に押しつけるような行為に夢中になっていた。

見れば、プリンスメロンを二つ並べたような愛香の乳房もまた、汗で濡れまくって、それが持ち主の呼吸に合わせて、ふるん、ふるん、と揺れ動いていた。

明るくて活発でクラスの中でも人気がある恋人が今は、ぼくにすべてを投げ出し、その身を委ねている！ そのことだけでも男子高校生のペニスはいっそもりもりとふくらんでしまった。

(愛香ちゃんって、ほんとに、女らしいって言うか……)

身体の下に感じる肉のやわらかさ。肌の温かさ。

でも――。

(こうしていても気持ちいいけど)

もつと動いてみたいかも……。

誠はそう思った。

身体は自然に動き出していた。するとまた、ねっとり湿ったくちびるとむっちり

と漲みなぎった太ももを備えたおさななじみは、眉間に皺を寄せてつらそうな顔を見せる。誠の身体の下で細い腰がよじれ、誠の太ももの横で愛香の太ももが一瞬抗あらがうかのように空を掻いた。びっくりして愛香の顔を覗きこむと、脂汗を流し、歯を食い縛っている。

(愛香ちゃん……こういう愛香ちゃんの顔もかわいい……)

ぐにっ……とやわらかくてきつい粘膜の層を割るようにしてまた腰を先に進める。みっちり詰まった肉の狭道きょうどうをこじ開ける感覚が気持ちよければ、引き戻す時の、龟头を引きとめるかのように膣肉が張りついてくる感触も気持ちよかった。

強く圧迫してくる膣肉輪をかき分けるようにまた進めると、女子高生の裸の腰がもう一回苦しそうによじれた。さらに、のしかかっている誠を拒むように一回――。

「い……た……っ」

持ち上がった。

「愛香ちゃん？ つらいの？」

「ごめん……やっぱりやさしい誠の方が好きかも……もう少し……ゆっくり……」

料理中に誤って熱い油の跳ねを浴びてしまったようなつらそうな顔と汗――。

「ね、ねえ誠……わたしのこと、きらいにならないでね……わたし、いつも、誠に言いたいこと言って——でも何もしてあげられなくて……素直に、なれなくて」

「何言ってるんだよ……さつきから、なんだか愛香ちゃんらしくないよ……」

三回、四回——氣遣い一つも腰を前後に揺すり、膣肉に擦りつけるようにゆつくりとピストン運動を繰り返した後で、むりっ、とめり込むみたいにして、ついに誠のペニスには根元まで完全に愛香の温かい膣肉の層に包みこまれていた。

「愛香ちゃん、奥まで、入ったよ……奥まで——」

「うん。ねえ誠……気持ちいい？ わたしで気持ちよくなってるの？」

「うん。も、もちろんだよ。当たり前じゃないか……！」

こねくるように動かして密着を確かめると、愛香の額の上をまた脂汗がつたう。

（一つになれた……）

オナニーでただ擦って出すのとは快樂の度合いが違った。自分勝手な挿入で埋めこんだのではなく、愛香と二人で協力して結合したんだ、というところのつながりみえないものを強く感じた。

（それに……愛香ちゃんのこんなやさしい声、ぼく今日初めて聞いたかも……）

とても愛おしくなつて、顔を寄せ、くちびるにくちびるを重ねる。おさななじみも

キスに伝えてくれた。これまでで最も自然に、最も気持ちの通い合ったキスができた。それにしても。

(やばい……気持ちよすぎる……これ以上動かしたら、出しちゃう……)

自分の亀頭のかたち、少女の膣が内側から広がっているのがわかる。愛香ちゃん  
の性器が、ぼくのものに合わせられてくれようとしているんだな、と誠は思う。最初はま  
だ完全には馴染めずにいたのが、みり、みり、と擦れ合っているうちに愛香の性器の  
方から誠に合わせてくれていっているような。

「ねえ、誠。もつと動いていいんだよ……」

「うん、で、でも愛香ちゃん」

「愛香でいいよ」

「え。う、うん」

こぼしてしまうことに対するおそれより、動いて深い快楽を得たいという欲求の方  
が勝った。ゆつたりと腰を動かし始める。ねちゃ、ねちゃ、くちゃ、くちゃ……と音  
が立ち始めた。引き、戻り、また引き、また埋めこみ直す。そのたびに誠の太ももが  
愛香の太ももの裏側に当たり、誠の下腹部と愛香の下腹部が擦れた。

ねちゃ……

やっぱり愛香の中も濡れてきているみたいだ。

処女膜が完全に裂けきったのか、ようやく愛香がうしろなうめき声を出すことはなくなっていた。まだ顔つきは苦痛をこらえるような感じには見えなかった。

それでも膣肉は誠のペニスのかたちと太さに多少なりとも馴れて、奥までしっかりと迎え入れている。表面だけは溶けかかった、でもまだ芯は硬い、バターのかたまりの中にぬくぬくと包まれている感じ。

もう少し強く腰を動かしたら――。

「あ。きや、誠……や、だ」

――きゆ。

「あつ誠つたら……ビクッ、て。うううんツ――」

「うわつ。愛香ちゃん……!」

きゆ、きゆ――と、何か小動物が鳴くような音を立てて、膣肉輪がしなしな、と収縮した。

(愛香ちゃんも、少しは感じてくれてる……?)

またなんにも考えられなくなってきた。今日は何曜日だっけとか、ここは寝室ではなくバスルームだったっけとか、そんなことどうでもよくなっていた。突きを繰り返

しているうちに、女子高生の膣肉もつきりとした反応を示すようになってきた。

まるで長い串で一つに繋がってでもいるかのように、誠の腰遣いに合わせて愛香の下腹部も動く。

引き戻す時には裂けた処女膜がやっぱ痛みを発するのか、まだ眉をひそめる表情になる。それが気になって誠は動きをセーブした。

「ねえ、誠。わたしで気持ちよくなってるんなら、そう言っつて。わたしと一つになって気持ちいい、つて言っつて。前からわたしが欲しかったんなら、そう言っつて」

「う……うん、ええと、愛香ちゃん一つになれて、気持ちいい……前から愛香ちゃんが欲しかった」

「わたしを抱きたかった？ だったらそう言っつて」

「うん……愛香ちゃんを抱きたかった」

「わたしを犯したかった？」

「……はあ？」

そんな発想は誠にはなかった。しかし豊かな曲線に恵まれたおさななじみは、割に躊躇なくそういうことを口にしてしているようだ。

いや——赤くなつたまぶたをひくひくさせているから、躊躇してはいるのか。

「ねえ、言つて。わたしが前から欲しかったんでしょ？ 征服したかったんでしょ？  
だったらそう言つて。おねがい言つて。言いなさい」

なんだこれは——。

逆ことば責め？

でも、表現こそ過激ではあつても、愛香のことを欲しかったことに違ひはない。

「うん。ぼく、愛香ちゃんが欲しかった。征服したかった！」

「じゃあ、もつと征服してよ……誠」

もう一回腰を動かす。今度は少し引き戻し、再度埋めこむ。亀頭がまた腔粘膜を擦つたとたん、誠の身体の左右にある愛香の太ももがまた、ひくんと引き攀つたような動きを見せた。口では誠に対して責めてきても、やはりまだつらいようだ。

腰の動きはやめて、マットについていた手で十七歳の豊かでやわらかなミルクタンクにそつと触れる。下からそつと包みこむようにすると、今度は愛香の身体は短く、ひくつ、と、それまでとは違った震え方を見せた。可憐な乳首に指腹を当ててまさぐると一回波打つように腔肉輪が縮んだ。さらに。

食虫植物が獲物を捕らえた瞬間のように——。

きゆう、ともう一回縮んだ。

「ん……誠、中で、いっぱい——ん。ん　なんか、誠と、一つに」

くちびるとあごが少し動くだけで、吐息といっしょに、汗の混ざった愛香の体臭が立ちこめていく。泡はようやく消えかけていた。その代わりにくらがりの中でも、汗で艶光る愛香の肌がまぶしい。

ぬぶず、ぬぶず……。

今度は少し勢いをつけて腰を打ちつける。癒着ゆちゃくしたかのようにも思っていた亀頭肉と膣肉だが、愛液と破瓜はかの血のぬめりのおかげか、多少はスムーズに動かせた。束になった強靱な輪ゴムのような抵抗感に耐えながら亀頭の先で奥を突くと、くにや、と膣の奥の何かに触れた。

「激し——誠……くう！」

おさななじみが苦しそうなうめき声を出した。だが愛香の下半身そのものはむしろ誠を受け入れる姿勢をくずさない。二つの太ももが誠の足を挟みこんできた——。突きこむ時にはある程度の快感があるらしく愛香は、

「誠と、溶けて、もっと、もっと、一つに、なつてく……ふはあ……ううん」  
と、甘つたるい声を出す。

しかし引き戻す時にはまだ——。



「そうよ誠くん。じゃあとりあえず、全部脱いで」

「……冗談ですよね、また。口が勝手に動いたんですよ。あはは。梅先生、ほんとう冗談ばかり……」

しかし麻友美は笑みをたやさないまま宣言した。

「あら。本気よ。根こそぎ本気。絶賛本気。本気と書いて『キメ』って読めちゃうくらい本気」

「せめて『マジ』くらいにしておいてください、梅先生……」

「ふふっ。もちろんわたしたちも脱ぐわよ。その方が誠くんも血流がよくなって、より興奮して、たくさん精子を出してくれるでしょうから」

麻友美は白衣を脱ぎ、スカートやキャミソールもくねくねと脱いだ。ゴージャスなレースで飾られたブラときわどいカットのショーツだけになってしまった。

蠱惑的こわくに盛り上がったおっぱい。魅惑的な丸さのお尻。引き締まったボディのメリハリが下着によって強調されていた。女医というよりなんだか人妻っぽい。独身のはずだけど。

「あたしも〜」

巨乳のナースもナース服を脱いで、ぷるりんと下着姿になった。

こちらは意外にも白を基調にしたシンプルなデザインのパラとショーツ。清楚な布地に無理やり詰めこまれた重たそうなおっぱいは、ちよつとの身動きでもふるんふると揺れ動く。美尻も白い布地の中でむっちり持ち上がっていた。

「さあ、わたしやなっちゃんだけじゃなくて、愛香ちゃんも」

「えっ、でも……わたし、なんか恥ずかしいし」

「誠くんを悩殺して、ぐんぐん勃起させるの。それもアルバイトのうちに入っているのよ。それとも愛香ちゃんは、わたしたちの下着姿だけで誠くんが興奮して勃起してもいいの？ 許せるの？ いやでしょう？」

「わ……わかり……ました」

ゆつくりとパジャマを脱ぎ始める愛香。

すぐにハッと気づいて、誠を睨みつけてくる。

「ちよつと誠……恥ずかしいから、見ないでよ」

誠は、ごめん、と言って後ろを向こうとしたが、麻友美はそれにも口を挟んできた。「あらあら。誠くんを興奮させるためなんだから。見せなきゃ。見せつけなきゃ！」

「そ、そんな、麻友美先生……」

羞恥に頬を染めつつも愛香はパジャマ上衣を脱ぎ、次にパジャマパンツを下ろして、

下着姿になった。

今日はブラもつけていた。淡いピンクの生地に小さな花の柄がちりばめられたキュートなブラ。ブラもお揃いのショーツも十七歳の肉体にエロく密着していた。生地が薄いのか、乳首は敏感そうにぼつちりと浮き上がっている。陰丘の上にも布がぴっちり張りついている。

(愛香ちゃんも……やばい。かわいい……)

思わず見蕩みとれてしまう誠まことに、知性もお色気も豊かな女医が催促してくる。

「さあさあ、わたしたちがここまで脱いだんだから、誠くんも脱がなきゃ。誠くんはがっぷり全部脱いでちょうだい」

「え……ぼ、ぼくはいきなり全部？」

「そうよ。そしてわたしたちを蹂躪じゅうりゃんしてちょうだい」

「蹂躪じゅうりゃんで……」

しなやかな手が伸びてきてTシャツを無理やり脱がされた。女医だけではない。

「男らしくないよーん」

「そうよ！ わたしたちがここまで脱いであげたんだから！」

ナースの手も、それに愛香の手までが群がってきて、ジーパンとトランクスをあつ

という間にむしり取られてしまった。

「じゃあ、もう少し刺激を与えてあげるから、ここに仰向けに寝てちょうだい」

「み……みんな、なんで目の色を変えてるんですか……？」

もうここまでされたら、いやですと言える雰囲気ではなくなっていた。仕方なくストレッチャーの上に横たわる。

でも、やっぱり気になる。

(……どうしてこんなことになったんだろう……ここはちゃんとした病院なのに)  
新薬の試験だと梅先生は言うけれど。

他の医師や看護師さんはこんなことが行われているのを知っているんだろうか？  
ひよつとして、バレたらまずいんじゃないだろうか？

そう訊いたら。

「あら、平気よ。バレなきゃいいんだから」

「う、梅先生……っ」

やっぱり秘密なんだ！

「そうだ。ねえ誠くん。『歯科医師会』ってどこかアナウンサーを目指す二人組の漫才コンビに似てると思わない？ 『司会司会』みたいなの」

「……………」

二十七歳の大人なのに、くだらないことを言っつて話を逸らそうとしている梅先生つて一体……。

「とにかくそういうことだから、細かいことなんか気にしないで、どんどんおつききせてね」

「は、はい……」

言われなくても、女性三人の下着姿だけでももう興奮して、突っこみどころではなくなっている。ペニスはちょうど真上を向いていた。

(こ、これは、かなり恥ずかしいぞ……)

この前は同じように裸でベッドに仰向けになった愛香に口奉仕したわけだけれど、同じ体勢を取ってみて初めてわかった。裸の自分を周りの三人にジッと見られているというだけで、身体がカッカッと熱くなってくる。

誠の下腹部を感心したような顔で鑑賞しながらなつは言う。

「ほーんと、いいおちんちんよねー。あたしデジカメ持ってくればよかったなー」

「デジカメつて……写真なんか撮つてどうするんですか、なつさん」

「わあ。決まってるじゃん。その写真をネタに誠くんをユスるんだお」

「ぐっ……」

「むふふふ。ユスられたくなかったらあ、勃起なんてしなけりゃいいんだよーん」  
にへらと笑うむちむちナース。

一方、高価な下着のカタログから抜け出てきたような姿の麻友美は、なぜか不満そうな顔だった。

「うーん、この前角度を測った時は軽く百度超えだったのになあ。お薬のせいかな？  
何回もできるようになる代わりに最初はセーブがかかっちゃうのかなあ」

女医はナースとなんちゃって患者に、二人で刺激を与えてあげて、と指示した。

「はーい。待ってましたあ」

まず、なつがゆっくりと――。

誠の膝頭に指を這わせてきた。

ペニスを責められると思っていた誠にはこれは不意打ちだった！

「ううっ」

びくんっとうち腰が浮き上がってしまった。膝頭全体を手のひらで撫で回したかと思うと、指先は膝の裏側に忍びこんできた。裏のくぼみをくにゅくにゅとまさぐられる。それだけのことなのに、なぜか全身の血がだくだくとペニスに流れこんできた……。

「んえーっ？ 膝だよ膝？ 膝でそんなに敏感なの？ そういえばあ、この前の愛香ちゃんも似たような感じだったけなあ。いいなあ。ピチピチした十代の若い子は敏感で」  
自分だってまだ若いむちむちした二十三歳のナースは、じゃあこっちはどうかかなあと言つて乳首を舐めてきた。唾液をのせた舌先が小さい乳首をねろり……とねぶる。またしても、それだけのことなのに――。

「ひいっ」

誠は短い悲鳴を上げてしまつていた。反射的に起き上がろうとするが、なつにだめだめそのままそのままあ、と制止される。そして今度は仔猫がミルクを舐めるみたいにぴちやぴちやと乳首を舐められ始める……。

「や、やめてください……なつさん……」

誠は自分でも乳首がここまで敏感だとは思つていなかった。男にとつては退化した器官だと思つていた。違った！ 性感帯の一つだった！ ひと舐めされるごとにやるせない気持ちで胸の中がいっぱいになって、股間への血流もいっそう増してしまふ。

（ううう……前にもシャツ越しになつさんや梅先生にまさぐられたことは、あつたにはあつたけど……裸の乳首に直接だと、全然違う！）

「うふふ。じゃあそろそろ、おちんちんをかわいがつてあげるね。誠くんのつて、ほ

ーんと、前から思ってたけど、亀頭のエラの張りがいいだけじゃなくってえ、幹が太くてえ、イジりがいいがそういうなんだよねー」

「い、イジりがいいって……」

なつは、とまどう誠の顔をくすくすと楽しそうに覗きこんだかと思うと、出し抜けるに下腹部に舌を伸ばし、吸いついてきた。すでにここまでの他の場所への刺激だけでも感じやすくなっている誠にしてみれば、これで感じるなどというのは無理な話だ。

れるーり……ペニスの胴体を下から上に向かって舐められただけで膝から力が抜け、腰から背すじに初めてオナニーをした時に感じたのと同じぞくぞくした痺れが駆け抜ける。

また勝手に腰がストレッチャーから浮き上がってしまった。

今度はなつの舌は横から回りこんで、亀頭の裏側の縫い目みたいになっている弱いところをぬめぬめと舌先で攻撃してきた！

「ひあああ……なつさん、て、手加減して……」

「してるわよん。もつとりラックスしてねん。おねーさんに全部まかせてー」

確かにことばの通り、なつは性急な責めには出てこなかった。十七歳男子の裸の腰や太ももをそつとまさぐりながら、幹にちゅっちゅつとキスを繰り返す。

天井を向いていたペニスはさらに角度を増してしまった。それほど広いというわけでもない部屋には美女三人の放つ甘い吐息や体臭が徐々に満ちてきて、それにもまた誠は刺激を後押しされていた。

誠の陰毛を根元の地肌といっしょに擦り上げるようにしながら、情熱的に実った巨乳の持ち主は今度は舌先だけでキス責めをしてくる。亀頭はもう真っ赤になって、鈴すず口くちから透明の粘液をとろーりと吐きこぼしている。そして幹に舌先がチョンと触れるたびに、やるせなさにフルフルと揺れるのだった。

さらに。

「うわっ。熱っ。今日も指がやけどしちやいそ」

「ひいひい。いきなりさわられたら……」

誠の悲鳴など無視してなつは肉棒を根元から上下に撫でさすると、息を飲んで見つめていた愛香に声をかけた。

「さあさあ。愛香ちゃんも。いっしょに誠くんのおちんちんをかわいがってあげよ！」  
そのことばで、呆気にとられていた愛香もハッと我に返ったようだ。

「い……言われなくたって！ なつちにばかり誠を好きにはさせないんだから！」  
まるで何かの呪縛が解けでもしたかのように、おさななじみの女子高生はストレッ

チャアの反対側に回りこんで、なつと同じように誠の下腹部に顔を寄せてきた。

「うわわ。愛香ちゃんまで、そんな……ぼ、ぼく、どうかなつちゃう……！」

うふふと笑って麻友美も話しかけてくる。

「誠くん。もう諦めたら？ 二人に身を任せちゃいなさい。今さら紳士ぶってもしょうがないでしょう？」

「ぼくは、別に、紳士ぶってなんか、いませんけど……くううっ！ い、いきなり二人同時に息を吹きかけないで！ わわ、二人同時に舐めないでよお！」

立ち上がろうと思ったが、ペニスに顔を寄せて舌を伸ばしながら愛香もまたなつと同じように誠の腰や太ももをしつかりおさえこんでいる。誠はもう身動きできない状態だった。と——。

愛香の指が睾丸をまさぐり、さらには玉袋と肛門の間のひときわ敏感な皮膚をくりくりと撫でてきた！ 誠の身体の中の筋肉のコリでも探るみたいに丹念な手つきでまさぐってくる。こそばゆさを越えたひりひりした痺れが下腹部を駆け巡った。

「くうう……愛香ちゃん、そんなところもう——ふうう！」

「うわわああ。さすが愛香ちゃんだね。誠くんをいい声で啼かせるんだねえ」

「な……なつさん……啼かせるって、なんですか……」

「あれ誠——まだしゃべる余裕あるんだ？」

「あ、当たり前だよ愛香ちゃ……くあ！」

もう一度抗おうとしたけれど、二人がかりで左右から責められては、やはりどうしようもなかった。

「うふふつ。今の状態で、おちんちんを左右同時に舐め舐めしたら、誠くん、どんな声を上げてくれるのかなーっ。どんな顔になっちゃうのかなあーっ」

「あ、あの……なつさん！ もう充分、ぼ、勃起したでしょ！ 先生！ やめさせてください！」

「まあ。そんなに早く新薬の試験をしたいの、誠くん？ うふふ。気持ちはわかるけど、そんなこと言われたら、もっともつと焦らしてあげたくなくなっちゃうじゃない。なつちゃん、愛香ちゃん。もつとつづけてあげてね♪」

「そ、そんな……心底楽しそうに言わないで……」

なつは、はい、と明るく返事をする、指先でそつと亀頭の先の割れ目から洩れた粘液をすくい、亀頭傘の表面に塗り広げ始めた。限界近くまで膨張しきり充血しきった亀頭傘はぬるぬるの粘液にまみれて、つーん、と強い男の匂いを放つ。なつも愛香もそれを間近から吸いこんで顔を赤らめているようだった。

それでも二人とも指の動きを休ませることはない。いや、それどころか。

「キスしてあげるねん。待ちかねてたでしょん」

なつがてらてら光る亀頭の先端に、ぶちゅ、と口をつけた。

「くああ。なつさんの口、やわらか……!」

たちまち、限界だったはずの傘肉がいつそうぷっくりと膨張する。と、愛香も反対側からいつそう身を乗り出して、こちらはペニスの横腹を舐めてきた。下着姿の美女と美少女二人にかしずかれるようにして同時に奉仕される——日常生活では絶対にありえないし、誠など想像したことすらなかった事態だった。

れろれろれろーり……愛香の舌が万遍なく幹を往復する。

ちゅ、ちゅ、ちゅっ……なつの舌先は触れたり離れたりを繰り返しながら、鈴口の周りで円を描くようにソフトな刺激を加えてくる。舌だけでなく時折愛香となつの鼻息がふうっ、ふうっとな吹きかかるのも、これまたたまらなかった。

さらに。なつもついに舌全体を使ってねっとりとした愛撫を施し始めた。亀頭の表面のカーブに沿って、てれろ、てれろっとな舐めてくる。舐められたところから妖しい刺激が下腹部全体に広がって体温がますます増してしまふ……。

「ねえねえ、誠くん。あたしと愛香ちゃん、どっちが気持ちいい？ どっちにされるの

がうれしいかなあ？」

「そ……そんな、なつさん……」

「誠。正直に答えなさいよ。わたしたちの顔色見て答えないでよ」

「愛香ちゃんまで……そんな……どっちも、すごいよ……比べられないよ……」

なつのは技術に裏打ちされた的確な責め。舌はちよつとだけざらざら感がある。それで敏感な傘肉をねぶられるのだからこれはたまらない。一方愛香のはいかにも不慣れでこわごわとしたやり方だったが、それが舐め方のリズムの微妙なずれとなって結果的に左右同時攻撃の効果を高めていた。

「比べられないとか、そんなこと言っちゃって。内心では比べまくってるくせにい」  
「そうなの誠？　ちよつと許せないかも。こうしてあげる」

ナースと女子高生はまるで示し合わせたかのように二人そろって、誠のペニスにぐちびるを密着させてきた。おたがいの頭がぶつかからないように、なつは右から。愛香は左から。

その上。ゴージャスな下着をまとった女医が誠の足元にひざまずき、男子高校生の裸足の足指を口を含み、ちゅうちゅうと吸い始めた。

「ひい……ず、ずるい……さ、三人で同時なんて、ずるい……っ」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!